慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	応用行動分析家の行動形成
Sub Title	
Author	山本, 淳一(Yamamoto, Junichi) 石塚, 祐香(Ishizuka, Yūka) 大森, 幹真(Omori, Mikimasa)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2022
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.93 (2022.) ,p.[123]- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本淳一先生退職記念
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000093-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

応用行動分析家の行動形成

山本淳一[1]・石塚祐香[2]・大森幹真[3]

[1] 慶應義塾大学文学部・[2] 筑波大学人間系・[3] 早稲田大学人間科学学術院

科学者の行動も環境の変数によって制御されている。ことばも行動なので，論文やシンポジウムでの話題提供，講演などの科学者/実践者の言語行動も環境の制御変数によって制御されている。自分自身で叙述（タクト）できない制御変数と行動との関係を，多くの方のインタビュー記事を読むことで，知ることができたことは，次の研究を進める上で，新しい動機づけ操作であり，弁別刺激になります。[注1]

11 名の先生方のインタビューを経て，山本淳一先生（以下，山本）に大森幹真（以下，大森）と石塚祐香（以下，石塚）がインタビューを実施しました。

大森：先生方にインタビューをした原稿を私たちで読ませていただきました。その中で共通性のある話題と，私と石塚さんが聞きたいことについて深堀りできたらなと思います。

山本：編集過程で読ませてもらって，自覚していない自分を見ることができて面白かったです。なので，好きなことを聞いてください。

大森：まず初めに，Dr. Schreibman（元・University of California San Diego）が仰っていた，山本先生は学生に「この研究をしなさい」と強く言わないというところですが，それにはどのような経緯や思いがあるのですか？

山本：自分自身を振り返ってみると，学生さんや子どものストレングスを見つけるのが僕の仕事であると同時に，それで自分が強化をされてきたっていう経緯がきっとあると思うんだよ。元々は大学院生時代に僕が発達や障害の研究をやっていて，誰にも興味を持ってもらえなかったのを，助手をされていた望月昭（元・立命館大学教授）先生が，僕の強みを見出してくれたっていう思いが強いんだよね。その中で自分が望月さんにフィードバックをもらうために行動を自発して，関わるのが面白かったから，学生たちにもそんな contingency-shaped cycle になるようにしているのかも。あと，もし僕に何か皆さんが言ってくれるようなスキルがあるとすると，学生のストレングスが見えるのと同時に，学生が興味を持っている研究が，3 年ぐらいで花開きそうかなという見通しが見えるんだよね。だから，学部 3 年生のゼミでは興味があることを 3 つ持ってきてもらって，その中から花が開きそうなものをピックアップする。これは目的的にやっていて，3 つのテーマの中から，3 年生論文なのか，卒論なのか，大学院で展開するのかという点と，実際に本当にそういうデータが取れるのかという実現可能性と，学生さんのスキルズとの関係を考える。だから選択肢を出してもらって，この中ならこれって，僕がその中のテーマをデシジョンをすることを明示的にやったのね。

大森：ゼミ時代を思い出しますし，今は自分が教える側になったので，そのことは意識しつつも学生から色んなテーマで研究出来て楽しいと話が来るのは影響を受けていますね。

山本：あとこれは Laura（Dr. Schreibman）から直接学んだ訳ではないけど，彼女は第二世代の研究者

をたくさん育てて[注2]いて，僕を評価してくれているのもそこが似ている感じがするからかなと思っています。きっちりした研究の枠を設定した上で，クリエイティブな仕事をしていくけど，根底は行動分析学にあるよねということが意味合いとして強いかな。

大森：山本先生へのインタビューで多く出てきたのが Listeners' control（聞き手による制御）[注3]の話です。学生時代，よく他流試合をするときは，相手のコトバを使って語ってこいって言われていたことを覚えています。実際に，先生はどのように聞き手を意識して話されているのでしょうか。

山本：嬉しいことに作田亮一先生から落語の比喩をいただいているように，メリハリをつけて，相手の感情と感覚の中心に訴えかける部分はエッセンスとしてあるのかも。聞き手に対して喋る言葉の文体をいくつか設定して，それの中で僕が喋ってる。そのときのキーワードが，相手の語彙で喋ること。ペアレントならペアレントの語彙があるわけだから，それで喋るし，保育士なら保育士の語彙，心理師なら心理師の語彙があるわけだから，それを見極めてしっかりと使う準備は徹底的にやります。

大森：ある種，徹底的に聞き手である相手の行動を分析することが「好き勝手」に研究をしていいよって幅にもなっているように感じました。

山本：そうだね。社会学研究科の文脈から形式的なことを言うと福澤先生が仰った半学半教を，今の僕の言葉で言うと，例えば，石塚さんなら contingent imitation（随伴模倣；Ishizuka & Yamamoto, 2021）の展開からその枠の中で石塚ワールドができてくる。石塚さんがよく言うみたいに，NDBI（Naturalistic Developmental Behavior Intervention; Schreibman et al., 2015）では誤反応はないんだっていうような事とか，石塚さんの文体を使ってしゃべっていくと，これは僕の世界じゃなくて石塚ワールドができるわけ。で，そこに僕は参加させてもらうっていう感じなんで，それが好きなんだよ。大森君もそうやって，Segment-unit reading（文節単位読み；Omori & Yamamoto, 2021）っていうの，僕が教えたわけじゃないのに，完全に創出して，自分の方法論を作ったじゃん。そんな世界に入って，もうちょっとパラメーターいじったら面白いとかさ。大森の世界ができているところに入って行くというのが楽しいんだよな。僕が作った世界に人々を入れるっていうのがちょっと「教育」っぽくて好きじゃない。だってそこから山本の金太郎飴しか出てこないんだからさ，全然面白くない。だから，鈴木誠先生の論文を添削したときに，「適宜修正して」って言ったのも，松田壮一郎君の日本行動分析学会学会賞受賞論文（松田・山本，2019）を，この論文好きなんだよねといったのも同じ感覚だよ。少し他人事すぎるかなと思ったけどね。簡単に言うと，僕は自分で作ったワールドを自分で見るんじゃなくて，人が作ったオリジナリティあふれる世界を見るのが好きなんだよ。特にサイエンスとヒューマンサービスの分野に関して。そういう景色を学生さんや共同研究者は僕に見せてくれているんだよ。でもアイディアは言ったり，枠組みを出したりはしている。

大森：自分の語彙を相手がわかる語彙へ paraphrase する（言い直して伝える）ことも他の研究者と協働する上で必要なことですし，そこが工学者の鈴木健嗣先生との協働につながった部分ですよね。

石塚：今回，皆川先生と兎田先生から退職記念号のお話をいただいたときに，私と大森さんの頭に浮かんだのが，望月先生と武藤崇先生の対談の本「応用行動分析から対人援助学へ」（望月・武藤，2016）でした。対談の企画を山本先生にご説明した時に，先生は一番初めに「望月先生と対談がしたかったな」と仰っていましたね。もし望月先生と対談するとしたら今どんなことをお話されますか？

山本：情緒的というよりも，ドライな話をするかな。本当に適切な距離感を作ってくれた人で，望月さ

んは僕の研究や臨床に納得しないところもあるし，僕は望月さんの考え方に納得しないところもある。もし望月さんがいたら，NDBI には否定的だと思うんです。「子どもに何か教える（教示）のではなく，援助・援護の機能的関係をつくるのが行動分析家なんだから」と言うと思う。「山本は心理学者じゃなくて行動分析家のはずだろう」って。「行動分析家だったら環境の変数だけを徹底的に追っかけろよ」って。で，それを貫いたのが望月昭ですよっていうことを，僕の徹底的行動主義と応用行動分析学の論文（山本，2021）に書いた。でも僕は違うよっていうことが書きたくて。僕にとっては，もっと発達モデル，つまり子どもが育っていく過程が面白いし，ギャーと騒いでいる子どもが穏やかに笑顔になって行く過程が大好きなわけでしょ。けど，等価性の論文（山本，1992）はインパクトがあったみたいで，望月さんもそこに興味があったと思うし，共著論文（Mochizuki, Nozai, Watanabe, & Yamamoto, 1988）も書いている。要するに徹底的に環境を操作すれば，今までできないと言われていた行動が，すぐに等価関係として出来上がる。等価関係って，徹底的に刺激間関係で見ていくパラダイムでしょ。発達も含んだ内的なものを想定しないし，教示モデルじゃなくて，援助・援護モデルなんだよ。行動レパートリーをつくって，それを刺激として扱って，さらにその刺激同士の関係をつくる，という技なんだよ。等価関係研究を通じて，ヒューマンサービスの職人になるというところが，望月さんとの共通の認識だったと思う。ただ，スタートラインの，「行動レパートリー」をつくる仕事を，支援者が行うか（山本），行わないか（望月）の，根本的な違いは，埋まらなかったし，埋める必要もないと思っている。ただ，望月さんの文章には迫力があった。頭にきたら文章で返していくというのが望月さんなんだよね。その文体は弾むようで結構好きだな。

大森：武藤先生も山本先生と望月先生の文体の対比はお話されておられて，論理と人柄で書き方がだいぶ違うなとお伺いしました。それこそ，私はよく後輩たちに山本先生から文章の書き方を学びなさいと話をしていることが多かったです。先生も恐らく初めから書くことがすごく上手だったわけではないと思いますが，どのように書くことを明示的に学習されていったのでしょうか。

山本：これは，大学院生向けに載せてほしい話だね，素晴らしい。僕は，上手な文章は書けなかったんです。最初に論文を書いたのは，社研の紀要（山本，1988）で刺激の過剰選択性のレビューです。1ヶ月ぐらいずっと苦労して書いてた。KJ 法を使っての先行研究のマッピング・論点の対比・分量の調整・論理構成の順に進んでいった感じかな。例えば論文を引用するときに，対象者，年齢，手続き，方法，結果を1文ずつ，同じ分量でマッピングしていくことが重要だっていうこと。これを博士課程の初年度くらいに繰り返しやってきたと思います[注4]。僕がいつも苦労しているのは，ただ自分自身の「お勉強しました」的なものじゃなくて，誰も言ってないことを盛り込むことです。学生には，他でやってないオリジナリティを，自分の実験の中から見つけてトピックセンテンスとして3つぐらい並べてみなよっていう風にして，まとめてもらう。まずは，自分のオリジナリティを見つけて，その後にレビューする。

今話したのは，論理構成の問題。今度は，文章の問題に突き当たった。霊長類研究所時代なんだけど，色んな原稿を浅野俊夫先生に見せたんだよ。そしたら分からないって。エッセイを書く，文学を書くのじゃないんだからって。そこで紹介されたのが，本多勝一の「日本語の作文技術」（朝日新聞出版）だった。読み手に伝わる文章はどういうものか，今でもそれを生かして文章を書いている。あとは，練習だよね。石塚さんには，いつも総説書きなよって言っているんですよ。論理と分かりやすい文章を書く練習をしないと，何だか中途半端で，誰に対して書いているかわからない論文になるか

ら。ここでも，読み手による制御（readers' control）が大切なんだよね。それから，根本はやっぱり，書いている人の魂が入っていることかな。

大森：本当に魂と熱量はキーワードですね。何百回言われたか分からないし。

石塚：あとグッと来るかどうかもですね。

大森：今それで１個思い出したのが，慶應の心理学専攻って理系っぽいよねって話を昔していたんですよね。その時に山本先生が，「心理学専攻は文学部にあっていい」っていう話をしたのを覚えていて，その理由が「文章を書くっていうのは文学部の特権なんだ」みたいなことを言っていたんですよ。上手に文章を書くっていうのは，理系じゃ絶対学ばないから，ここで学んでいけみたいなことを言ったんだなと思っていて。

山本：そうなんだよ。文章はまさに言霊で，その人の考えとか思いを載せられるような１つのメディアだから。文章って，論理と文体，口語と文語っていうふうにいろいろな観点があるじゃないですか。でもよくよく考えてみると，「僕は Skinnerian で徹底的行動主義者です」と言っているのは，ヒューマンサービスを突き詰めるとそうなるしかないというのと，Verbal Behavior（Skinner, 1957）に影響を受けたということなんです。この本には，エビデンスは書かれていない。でも，文体や論理構成，熱量や魂，執念にグッときたってことなんだよ。僕は Skinner の研究論文に影響を受けているわけではなくて，研究から立ち上がってくる彼の考え方の徹底性や，実験者としての行動そのものに影響を受けている。文学部の学生としての私を揺さぶってくれたのが Verbal Behavior なので。

大森：最後に，１点だけ。先生は研究室の前に “Show me the data!!” というマグネットを貼っておられましたが，先生がデータとして捉えているものの範囲をお話しください。我々修了生の感覚だと，どんなデータでもデータになるからとお考えかなと思いますが。

山本：まず，僕にとっては行動分析学っていうのは１つのツールで，アイデンティティの基本は，ヒューマンサービスのサイエンスト/プラクティショナーなんですよ。行動分析学はその下にあるものなんだよ。行動分析学は定量化したものしか認めないみたいに標準テキストであるホワイトブック（Cooper, Heron & Heward, 2020）には書いてあって，データの定量化の仕方が営々と書いてあるじゃない。それでは不十分だと思う。データってそれだけでない。定量データは，１つ目的性がハッキリしたもので，それもサイエンスとヒューマンサービスの大きな貢献の基盤になる。むしろデータをどう活用するかということがヒューマンサービス研究のテーマになると思う。ただ文章を書き連ねるだけではだめで，徹底した論理構成が必要だと思う。臨床事例の記述でも，そこに含まれる論理を詰めていく書き方ができれば，優れた論文になると思う。定量化する科学者としての研鑽と同時に，優れた論理構築をして，文章を書く研鑽をするサイエンティスト／プラクティショナーでありたいと思っています。

大森・石塚：ありがとうございました，まずはご退職おめでとうございます。その上で，これからもよろしくお願いします。

引用文献

Cooper, J. O., Heron, T. E., & Heward, W. L. (2020). *Applied behavior analysis* (3rd ed.). Upper Saddle River, NJ: Pearson.

Ishizuka,Y., & Yamamoto, J. (2021). The Effect of contingent imitation intervention on children with autism spectrum

disorder and co-occurring intellectual disabilities. *Research in Autism Spectrum Disorder*, *85*, 101783 *(open access)*

Omori, M., & Yamamoto, J. (2022). Segment-unit reading comprehension training for Japanese students with autism spectrum disorder and learning disabilities. *Behavior Analysis in Practice*, https://doi.org/10.1007/s40617-021-00671-8 *(open access)*

松田壮一郎・山本淳一（2019）．遊び場面における広汎性発達障害幼児のポジティブな社会行動に対するユーモアを含んだ介入パッケージの効果　行動分析学研究，*33*, 92–101.

望月昭・武藤崇（2016）．応用行動分析から対人援助学へ―その軌跡をめぐって―．晃洋書房

Mochizuki, A, Nozaki, K, Watanabe, H, & Yamamoto,J. (1988) Acquisition and functional use of signing and writing in deaf adults with mental retardation through conditional discrimination. *Journal of the Multihandicapped Person*, *1*, 233–249.

Schreibman, L., Dawson, G., Stahmer, A. C., Landa, R., Rogers, S. J., McGee,G. G., … Halladay, A. (2015). Naturalistic developmental behavioral interventions: Empirically validated treatments for autism spectrum disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, *45*, 2411–2428.

Skinner, B. F. (1957). *Verbal behavior*. New York: Appleton-Century-Crofts.

山本淳一（1992）．刺激等価性：言語機能・認知機能の行動分析　行動分析学研究，*7*, 1–39.

山本淳一（1985）．自閉児における刺激過剰選択性：治療教育方法の検討　慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要，*25*, 45–54.

注 1　大森幹真さん，石塚祐香さん。多くの時間を費やして，企画を実現して，まとめてくださり，心より感謝申し上げます。ありがとうございました。また，インタビューを受けてくださった皆さん，インタビューをしてくださった皆さん，ありがとうございました。

注 2　Aubyn Stahmer (University of California Davis), Brooke Ingersoll (Michigan State university), Karen Pierce (University of California San Diego) など，自閉スペクトラム症への臨床研究と基礎研究の先端をいく教授たちを輩出している。

注 3　Skinner (1957) は Verbal Behavior において，言語行動の大きな制御変数として，聞き手の行動が刺激となって機能する事例を分析している。

注 4　論文執筆について，枠組みをしっかりとさせておくことで，研究と実践そのものにエネルギーと時間を費やすことができるはずである。論文は，情報共有と連携のために必要なツールなので，執筆行動が強化される仕組みが必要だと考える。現在，臨床現場で働いている公認心理師，臨床心理士が，ケース研究を論文にするためのテンプレートを作成し，研修会で配布している。実践現場での成果を，日本全国の実践現場の方たちとシェアしたいという強い思いから，「行動ウェルネス研究会」でオンサイト，オンラインによるワークショップを行っている。https://sites.google.com/view/behaviorwellness/